

優秀賞
(一般の部)

「絵本が繋いでくれたもの」

二戸部 直子

柳田先生、初めてお手紙を書きます。

私たち夫婦には、三歳半の娘がいます。三人揃って絵本が大好きで「今日は何を読む?」「これ読んで」そんな会話が日常に溢れており、家族の中心にはいつも絵本の存在があります。

今、私は妊娠九ヶ月を迎え、もうすぐ新しい家族を迎えようとしています。しかし、間も無く産休に入ろうとしていた六月中旬、切迫早産の診断を受け突然の入院となってしまったのです。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、面会は禁止。毎日

当たり前のように抱きしめていた娘と急に会えなくなった寂しさに、入院初日は涙で目が潤みっぱなしでした。

入院している病院は三階建てで、私の病室は二階にあります。窓を開けると一階が駐車場になっているため、かろうじて娘の姿を見ることができ、少しでもあれば会話もできることが救いでした。「どうしてお母さんお家に帰ってこないの?」と尋ねてくる娘に、「必ず帰るから待っていてね」と伝えることが精一杯でした。

待っていてくれる娘に何かできることはないかと考えた末、娘に手紙を書くことを思いつきました。まだ文字は読めませんが、迷路や塗り絵なら楽しむことができます。そこで便箋に絵を描き、二階の窓からひらひらと手紙を届ける、それが私たち

家族の新しい日常となりました。

入院して数日がたったある日、娘がホットケーキを焼いてくれました。ふわふわのホットケーキはとても美味しくて、一口ひと口を噛みしめつつも、あっという間に食べ終わってしまいました。娘にありがとうの気持ちを届けたい、でもどうやって？そんな時「しろくまちゃんのほっとけーき」を思い出しました。娘にいつも描いている手紙の迷路を、ほっとけーきの作り方順にアレンジして描いたらどうだろう？迷わず新しい便箋を出し、フライパンに生地を流し入れるところからできあがりまで描き上げ、翌日娘に渡しました。するとその晩、しろくまちゃんのほっとけーきの迷路で遊ぶ娘の動画が送られてきたのです。

私の心はなんとも言えない暖かい気持ちでいっ

ぱいになりました。度々読み聞かせをしていた「しろくまちゃんのほっとけーき」の絵本が、娘と私を繋いでくれたような気がしたからです。

それからは、私が描く絵手紙は絵本をテーマにしたものになりました。「今日は「おばけのてんぷら」にしようかな？」「十一ぴきのねこ」にしようかな？」そう思いを巡らせながらひらひらと届ける絵手紙は、娘が色を塗り私の元へ返ってきます。

退院まであと少し、時折気持ちが沈むこともあります。そんな時支えてくれるのは娘から届いた何十通もの絵手紙です。家族の中心にあった絵本の時間が、離れて生活している今でもこうして私たちの心を繋いでくれます。先日、退院したら読んであげようとネットで「モチモチの木」を注文しました。また娘の横に座って読む日を心待ち

にして。最後まで読んでくださりありがとうございます。
いました。

柳田邦男先生からのメッセージ

〔優秀賞〕

二戸部直子さんへ

毎日、親子で絵本を読む。あるいは、絵本大好き
になった子が、やがて成長して家庭を持ち、読み親
しんだ絵本や新しい絵本を今度はわが子に読んで
あげる。あるいは息子や娘が中年期になり、時折実
家に集まったときなどに、老い始めた親と子ども
の頃に読んだ絵本にまつわる思い出話をする。

そういう“家庭の絵本文化”というものは、子
にとっても親にとっても、まろやかなこころの持

ち方やみずみずしい感性をいつまでも失わないよ
うにするうえで、とても大事なことだと、私は考え
ています。

二戸部さんのおたよりを読んで、私は「こうい
うかたちの“家庭の絵本文化”というものもある
んだ」と、感服するとともに学ばせて頂きました。

三歳半の娘さんのいる二戸部さんが、急に切迫
早産のため入院を余儀なくされたとのこと。コロ
ナ感染防止のために面会禁止。母親にとっても娘
さんにとっても、耐え難い“別離”ですね。

母親は夫が車に娘さんを乗せて病院の駐車場に
連れてくると、二階の病室の窓を開けて、娘さん宛
の絵手紙を落とす。絵手紙は、いつも読み聞かせて
いたお気に入りの絵本を素材にしてボールペンで
描いてある。夫と娘さんはそれを拾って持ち帰る

と、娘さんが家で絵手紙に色を塗って、次に来るときに病院の受け付けに届けてくれる。

母親による毎日の絵本の読み聞かせはできなくなっても、母子が共通に愛着を抱く絵本を素材にした絵手紙の交換によって、心を繋ぎ続けたのですね。すばらしい着想だったと思います。絵手紙は何十通にもなったというのですから、娘さんにとっては、たとえ母親に抱っこされなくても、母親の愛情を密度濃く感じ取り、淋しさに負けない楽しさと喜びを心に深く刻んだに違いないでしょう。

これもまた、ユニークな「家庭の絵本文化」だと言えると思います。

人は往々にして「コロナだからできない」と、あきらめの考えに支配されがちです。しかし、二戸部さんは、「たとえコロナで面会が禁止されても、何

か少しでも対面に近いコミュニケーションの方法はないか」と、次善の策を考えたのですね。世の中がいろいろと厳しい状況になり、思うようにできないことが多くなったとき、そういう頭の回転のさせ方がとても大切になります。そのような意味でも、二戸部さんのおたよりはとても大事な示唆に富んでいると感じました。